

---

## 真似ることとコピーすること

---

細馬宏通 (滋賀県立大学 人間文化学部)

---

最近の比較心理学の成果から、動物における「模倣」は、モデルとなる相手の行動をそのままコピーするようなものではなく、逆に、行動の中に潜んでいる特定の構造の分析によって行われる、とても抽象化された行動であることが分かってきた。

たとえば、霊長類の模倣はいわゆる「サルマネ」ではない。マウンテンゴリラがイラクサの葉を食べる行動は、ある種の模倣によって獲得されるが、それは、モデルとなる他個体の行動をまるごと写しとるようなものではなく、むしろ、「不要物をとる」「葉柄をとる」「葉を折りたたむ」などの主要点のみを共通とした、さまざまなヴァリエーションを伴う行動である(Byrne 2003)。

ヒトの幼児でも、「模倣」は必ずしも行動のコピーを意味しない。たとえば大人が三歳児の前で自分の耳を触ると、子どもは、同じ側の耳を触る傾向があるが、左耳を左手で触っても、右手でクロスして触っても、子どもは気にしない。つまり、どちらの耳を触るかは真似しても、どちらの手で触るかは真似しないのである (Bekkerling et al. 2000)。

これら目的志向的な「模倣」に比べて、わたしたちが体験する真似には、しばしば行動の目的達成には関係ないディテールが含まれることがある。物真似芸人は、ただコップで水を飲むことや歌うことを真似るのではなく、ある有名人がコップで水を飲むことや歌うことを真似る。つまり、他の霊長類なら生存には不必要な偏差として切り捨ててしまいそうなできごとを「個性差」や「個性」としてすくい上げ、真似ることを楽しむのである。

他個体の行動から生存に必要な構造を抽出するのではなく、むしろその偏差を抽出するこの奇妙な性質は、ヒトにおける「かたち」の認識に大きな影響を及ぼしているに違いない。

本発表では、「模倣」の問題を通して、われわれの「かたち」の認知の特異性を明らかにするとともに、その認知を拘束している条件についていくつか具体例を挙げて論じる。

CLOSE

Javascriptをオフにしている方はブラウザの「閉じる」ボタンでウインドウを閉じてください。